

水原紫苑歌集

『快樂』

(短歌研究社)

「宇宙を浮遊する魂の歌」そんな印象を持った一冊。魂は自在であり、人間の姿をしたり、空に同化したり、夢が湧き出る井戸であったりする。

黒妙くろたへのたましひひとつ泛ばせてにんげんのごとく湯浴みせりけり

わたくしの溶けゆく空に星星の生老病死さらさらと在り

井戸なりしわれより夢を汲みてゆく少年少女銀髪にして

通底して宇宙への憧憬が感じられ、日常から非日常へ飛躍する壮大な世界観がある。

自転車に乗らずは宇宙にゆかれずと欺きたりしグラジオラスよ

萩の枝に四十雀乗り地球外生命のごとくゆれるたりけり

鏡、神などのモチーフが繰り返し詠まれ、美しく怖い。

鏡持つ人類さびし 鳥、けもの、石、夕焼も鏡見よ 狂へ

くれなるの萩に黄蝶がとまりけり神は死すともまなこ 残らむ

七五三首(＋長歌＋反歌)を通読した時、みな異次元の快樂を味わうだろう。

(大西 淳子)

千葉優作歌集

『あるはなく』

(青磁社)

春の空気につつまれたデビュー作である。

泣いたあとしづかに顔を拭ふ朝あなたは冬のけやきにもどる

「冬のけやき」を詠みながら、むしろやがて訪れる次の季節のほうに作者は強く惹かれてるように思われる。各章冒頭におかれた王朝和歌との響きあいもあって、作者のどの歌の息づかいにも春のうららかなさ、ものがなしさを感じずにはいられない。

トラ縞の猫総毛立ち奮ひをり喧嘩腰つてかういふ腰だ 真つすぐな胡瓜の並ぶスーパーにぼくのあるべき場所

はなかつた

シュレッターされてはじめて「社外秘」と書かれた紙が知る春の風

やまひだれに春つて漢字はないですかもうこの仕事やめていいですか

たましひが一尾の鮭にかへるまで言葉の滝を見上げて ぬたい

優美と洗練の底にある生活の手触りが心にのこる。猫を観察し、スーパーで買い物をし、機械で紙を裁断する。その背後には、社会に対する違和感と「言葉の滝」への強い信頼がある。

(岩崎 佑太)